

高松赤十字病院紀要の活性化に向けた 図書・紀要作成委員会の取り組み

高松赤十字病院 脳神経内科¹⁾, 胸部・乳腺外科²⁾, 血液内科³⁾, 皮膚科⁴⁾, 薬剤部⁵⁾, 検査部⁶⁾, 看護部⁷⁾, 事務部⁸⁾

峯 秀樹¹⁾, 監崎孝一郎²⁾, 井出 眞³⁾, 濱田 利久⁴⁾, 岡野 愛子⁵⁾, 高杉 淑子⁶⁾,
村井由紀子⁷⁾, 林 美紀⁷⁾, 石下 美代⁸⁾, 山地 久美⁸⁾, 新原 祐司⁸⁾, 瀧 裕子⁸⁾

要 旨

高松赤十字病院紀要は当院職員が投稿した論文を査読のもとに掲載し、院内外への情報発信の場として大きな役割を担っている。2013年に第1巻を創刊し、年1回発刊している。投稿数は年々増加し、第7巻は18篇を掲載した。今回、本紀要と同様に様々な職種の幅広いテーマで演題募集を行っている日本赤十字社医学会総会に重点を置き、その発表演者に積極的に投稿を呼びかけた。図書・紀要作成委員会の本紀要活性化に向けた取り組みについて報告する。対象は第56回日本赤十字社医学会総会で発表した演者14名である。演者の学会発表時に聴講し、写真撮影を行い、学会終了後に発表の労いと演題内容の感想を述べた写真付きメッセージレターを演者に届け、投稿の呼びかけを行った。結果、14名中7名が投稿した。第8巻は計21篇と過去最多の論文を掲載した。初めて学会発表を経験する研修医には特に好評であった。今後も本紀要の活性化に向けて活動を継続していきたい。

キーワード

紀要, 高松赤十字病院, 高松赤十字病院紀要, 論文, 投稿

はじめに

図書・紀要作成委員会は医師、薬剤師、看護師、検査技師、事務職員など多職種の委員で構成され(図1)、年に約5回委員会を開催している(図2)。主な委員会の役割は定期購読雑誌の選定・契約、各部署から求めのあった図書の購入の可否決定、所蔵書籍の管理、文献の手配、高松赤十字病院紀要の作成・発刊である。

高松赤十字病院紀要は当院職員から投稿された総説、原著、臨床研究、症例報告などの論文を査読のもとに掲載しており、院内外への情報発信の場として大きな役割を担っている。2013年に第1巻を創刊し、年1回発刊している。投稿数は年々増加し、2019年の第7巻は18篇を掲載した。本紀要投稿への周知・呼びかけは、従来は編集部員を通じて各部署に連絡、全職員に向けて院内WEBに掲載、その年に何れかの学会で発表した

演者に個別メール等で行っていた。今回、図書・紀要作成委員会では本紀要と同様に様々な職種の幅広いテーマで演題募集を行っている日本赤十字社医学会総会に重点を置き、その発表演者に投稿の呼びかけを積極的に行った。本紀要への投稿数を増やすために図書・紀要作成委員会の行った取り組みについて報告する。

対象・方法

対象

第56回日本赤十字社医学会総会(2019年10月、於：広島)で発表した14演題の演者14名

方法

- ① 演者の学会発表時にできる限り聴講する。
- ② 日本赤十字社医学会総会の学会運営係に了承を得た上で当院の広報係の協力のもと、学会発表時に演者の写真撮影を行う(図3)。



図1 図書・紀要作成委員会メンバー



図2 図書・紀要作成委員会風景

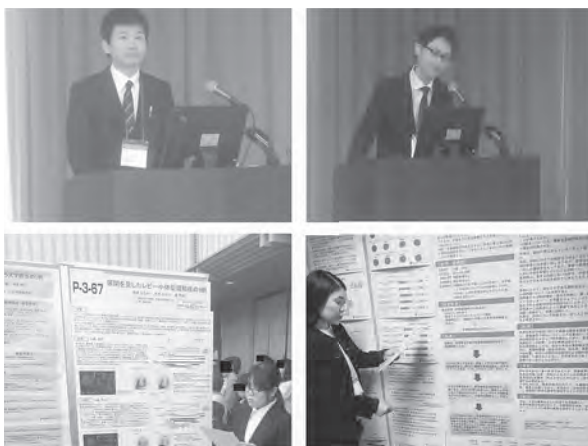


図3 学会発表時の写真

- ③ 学会終了後すぐに学会発表の労いと演題内容の感想(図4)を述べた写真付きのメッセージレターを演者其々に届け、同時に本紀要投稿への呼びかけを行う。(演者其々には3枚綴りのメッセージレターを届ける(図5).)

結 果

学会発表した14演題中7題の演者が高松赤十字病院紀要に論文を投稿した。研修医は学会発表

美馬郁代先生
 今回の学会では薬剤師という立場で患者様の目線に立って御発表をされ、座長をはじめフロアから非常に高い評価を得ていました。
 妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師という非常に難しい資格を取り、今後益々のご活躍を期待しております。
 次回の高松赤十字病院紀要に是非投稿をご検討ください。
 図書・紀要作成委員会

図4 演者への手紙(一例)

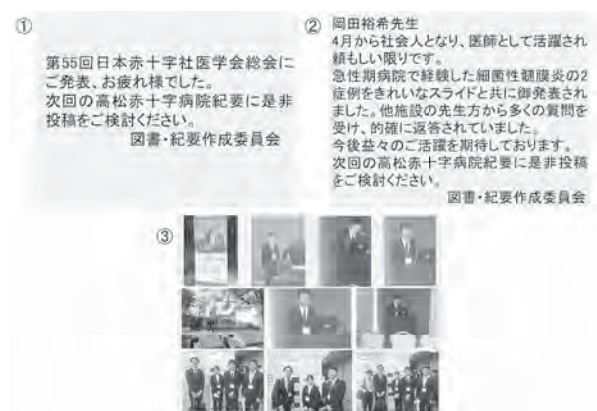


図5 実際の写真付きメッセージレター(一例)

した4名全員が本紀要に投稿した。高松赤十字病院紀要8巻は計21(総説1, 原著3, 臨床研究5, 症例報告12)篇と過去最多の論文を掲載した(図6)。医師, 研修医, 薬剤師, 検査技師, 理学療法士, 放射線技師と多職種からの論文が得られた(図7)。

考 察

高松赤十字病院は香川県を中心部に位置する564床の急性期病院である。当院は1100名の職員を有し、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、二次救急指定病院、臨床研修指定病院等に指定された地域の中核となる病院である¹⁾。高松赤十字病院紀要は2012年に当時の笠木院長が病院紀要の必要性を強く訴え、紀要作成委員会を立ち上げ、同年4月1日に委員会規程が定められ、院長を編集長とする6人の編集部員が選出された。年1回の発刊と定め、2013年に第1巻が発刊(創刊)された。2014年に第2巻が発刊され、網谷前院長が2代目編集長になり、「高松赤十字

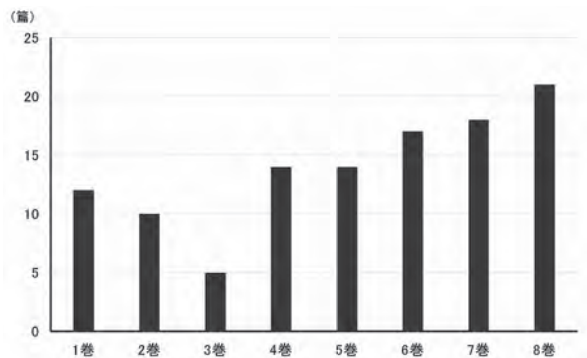


図6 高松赤十字病院紀要の論文掲載数

病院事業運営5ヵ年計画」の重点項目の一つに「院外への情報発信の推進」を掲げ、紀要の発展に尽力された²⁾。2018年に第6巻を発刊し、投稿規定の見直しを行い、現在に至っている。査読は原則1篇の論文につき専門分野の2名で行っている。2019年には第7巻を発刊し、投稿数は年々増加し、18篇を掲載した。本紀要は当院職員から投稿された総説、原著、臨床研究、症例報告などの論文を掲載している。医学のみでなく、医療に関するあらゆるテーマ、例えば病院経営、医療安全、福利厚生などのテーマも扱い、全ての職員に投稿の機会がある。チーム医療や他部門との協同研究など多職種にまたがるテーマを発表できることが長所の一つである。

論文作成については歴代の院長が多くのメリットを紀要の巻頭言で述べている^{1), 3)-9)}。業務の上での貴重な経験や知見を振り返り、整理・検討し、考察を加えて学会などで発表することは、発表する本人にとって有益であるだけでなく、周りの同僚にとっても貴重な体験になる。更に論文文化することによって、内容を一層吟味して成熟させることに繋がり、本人のみならず、当該診療科や部署全体にとって大きな財産となり、ひいては当院の存在を示すことになるとしている¹⁾。院内外への情報発信の場だけではなく、発表者には達成感と満足感、その分野での自信につながり、間違いなく、自身のその後の発展、成長をもたらしてくれる³⁾。一方、忙しい業務の中での学会発表は決して楽なものではなく、ましてや論文にするには多大なエネルギーを要する³⁾。十分な準備をして知識を身に付けて学会発表を完遂した演者に次のステップである論文文化をいかにして目指してもらうのか、また面倒で多くの時間を要する論文文化への作業を職員に自発的に促していくにはどうすべきかは大きな課題である。

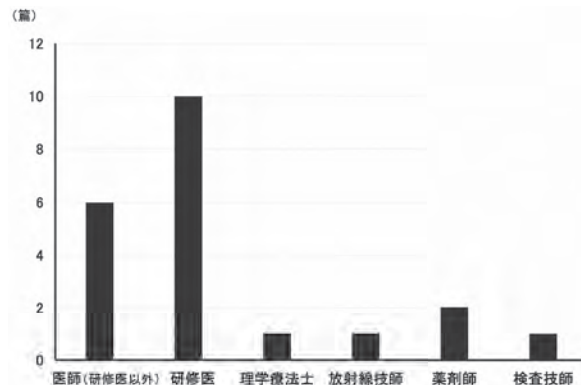


図7 第8巻の職種別の論文掲載数

本紀要は順調に掲載論文数を増やしてきたものの、更なる活性化に向けての活動を図書・紀要作成委員会で協議した。学会発表した演題を論文投稿につなげるべく、学会発表者に積極的にアプローチすることにした。本紀要投稿への呼びかけは、従来はその年に何れかの学会で発表した演者に個別メールで年に1回まとめて行っていたが、学会発表後すぐの演者の達成感がまだ残存し、モチベーションの高いうちに周知を行うことにした。学会については本紀要と同様に様々な職種の幅広いテーマで演題募集を行っている日本赤十字社医学会総会に重点を置くことにした。演者の学会発表時にできる限り聴講し、演者の発表時に写真撮影を行い、学会終了後すぐに学会発表の労いと演題内容の感想を述べた写真付きのメッセージレターを演者其々に届け、同時に本紀要へ投稿を呼びかけた。学会に発表した14名のうち7名が本紀要に投稿した¹⁰⁾⁻¹⁶⁾。研修医は学会発表した4名全員が紀要に投稿した^{12)-14), 16)}。初めて学会発表を経験する研修医には特に今回の取り組みは好評であった。学会で体験した高揚や達成感の冷めやらぬうちにアプローチしたことが論文作成・投稿につながった。査読者からの指摘を受けて、より完成度の高い論文に仕上げていく作業は今後の臨床にも大いに役立つであろう。本紀要第8巻は21篇中の10篇が研修医からのものである。研修医の臨床研修に学会発表や論文発表は重要である。今後、英文雑誌や専門雑誌に積極的に投稿するであろう若い医師に本紀要が論文を書く契機になればよいと考える。

本紀要が更に質の高い充実したものになるために、そして読者により役立つ雑誌になるために、図書・紀要作成委員会ではアイデアを募り、検討していきたい。例えば「新型コロナウイルス」な

どテーマを定めて多職種、多部門に募集を行うことも一つである。今後も本委員会では本紀要の活性化に向けて積極的に活動を継続していきたい。

おわりに

図書・紀要作成委員会の行った写真付きメッセージレーターを利用した今回の取り組みは非常に有用であり、高松赤十字病院紀要に過去最多の論文が掲載された。初めて学会発表を経験する研修医には特に好評であった。今後も高松赤十字病院紀要の更なる発展に努めていきたい。

尚、本論文中の写真や実名記載については本人の同意を得ている。

●文献

- 1) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第3巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要3：1，2015。
- 2) 網谷良一：高松赤十字病院活性化に向けての取り組み。高松赤十字病院紀要7：3-9，2019。
- 3) 笠木寛治：高松赤十字病院紀要創刊号の発刊にあたり。高松赤十字病院紀要1：1，2013。
- 4) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第2巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要2：1，2014。
- 5) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第4巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要4：1，2016。
- 6) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第5巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要5：1，2017。
- 7) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第6巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要6：1，2018。
- 8) 網谷良一：高松赤十字病院紀要第7巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要7：1，2019。
- 9) 西村和修：高松赤十字病院紀要第8巻の発刊にあたって。高松赤十字病院紀要8：1，2020。
- 10) 峯 秀樹，荒木みどり，小川 瑛，他：アルツハイマー型認知症として加療中にレビー小体型認知症の最終診断に至った症例の検討。高松赤十字病院紀要8：24-28，2020。
- 11) 石野あさ美，藤岡はる奈，杵保真奈美，他：認知症ケアチームにおける薬剤師の役割。高松赤十字病院紀要8：41-44，2020。
- 12) 千葉雄太，荒木みどり，峯 秀樹：意識障害と視床下部症候群を生じた視神経脊髄炎関連疾患の1例。高松赤十字病院紀要8：64-69，2020。
- 13) 板東ひろみ，荒木みどり，岡田裕希，他：尿閉を呈したレビー小体型認知症の3例。高松赤十字病院紀要8：73-79，2020。
- 14) 岡田裕希，荒木みどり，峯 秀樹，他：意識障害で肺炎球菌性髄膜炎を発症した高齢男性の2例。高松赤十字病院紀要8：83-88，2020。
- 15) 美馬郁代，六車浩史，黒川幹夫，他：無事3児を出産した多発性硬化症の1例。高松赤十字病院紀要8：92-96，2020。
- 16) 川野桂太郎，荒木みどり，峯 秀樹：低体温症による意識障害を呈したLewy小体型認知症の1例。高松赤十字病院紀要8：102-108，2020。